

Actions アクションズ

若手医師活動報告

手作り感染対策グッズを 紹介します

札幌医科大学 泌尿器科 助教
西田 幸代

札幌では5月中旬もCOVID-19の新規感染者が相次ぎ、非常事態宣言の解除が難しいのではないかと考えられています。東京、大阪の都市圏での発生前にさっぽろ雪まつり会場での感染者が報じられ、他県では非常事態宣言解除となった今も、減少傾向は足踏みの状態です。

こんな中、手製フェイスシールドを道内医療現場へ届けようと、高校生のグループが支援活動を始めています。自分たちで設計したフェイスシールドを医療機関に贈るプロジェクトの展開を、北海道医師会の会員にも活用していただきたいと、北海道医師会に直接電話がありました。この「BLOSSOM」(<https://blossomfaceshield.wixsite.com/faceshield>)は札幌国際情報、札幌南、札幌開成、札幌日大、登別明日中等教育学校等の20名以上の高校生によるボランティア団体で、札幌市社会福祉協議会に認定を受けて活動しており、札幌市を拠点に、さまざまな社会貢献活動を行っています。彼らのエール活動に感謝するとともに、若者たちの心意気を応援したいと思います。

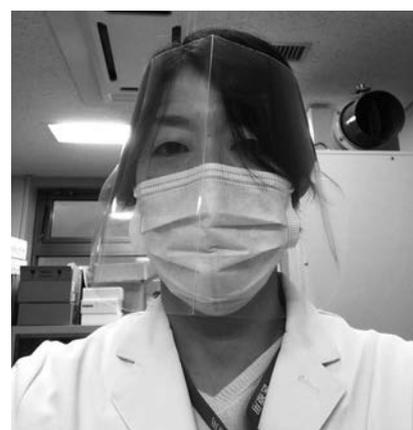
さて、PPEの絶対的不足の医療現場で、感染リスクと闘っていらっしゃる医療スタッフの皆さんの手製PPEの数々をご紹介します。

大阪暁明館病院泌尿器科の松下千枝先生は、大型のゴミ袋の設計図付で写真を送ってください

ました。ガウンは1日100枚を目標に病院の事務の方々と流れ作業で製作されています。感染症専門医のいない病院でもそれぞれが知恵を絞って診療に当たっています。

スーパーなどでもフェイスシールドを装着されている姿を見かけるようになりました。私の装着しているフェイスシールドはクリアファイルを使い、後方をクルリンパと回して留めるだけ、製作時間は約2分程度の簡単なものですが、くもりもなく視界良好。地域へ出張する際にフェイスシールドが用意されているとは限りませんので、かばんにはいつも高透明度のクリアファイルを忍ばせておきました。他には100円ショップのカードケースを使い、おでこに当たる部分にクリアファイル製のベルトでフェイスシールドを湾曲させた形状のものも紹介されました。

札幌時計台病院では日用品や作業用品を取り扱うお店から313円の不織布製のつなぎを購入し、防護服として使用しているそうです。また同院ではクリニカルエンジニアがビニールシートをプラスチック製のパイプとマジックテープで接続した簡易テントを作成し、肺炎患者のサクションやレスピレーター装着時に、ベッド上で簡単に組み立て実際に使用しているそうです。名付けて「いいテント」。ホースを曲げ、間を段ボールでつないだセットを頭部に設置、上にビニールをかけて処置時に飛沫を防ぐ簡易テントミニも便利だそうです。マスクは現在、多く





の会社から手に入りやすくなり、不足は緩和してきていますが、手術物品を包む被布を利用してホッチキス止めた簡易マスクを使用する部署もあるそうです。

必要物品の不足の中で、患者と医療者の感染を防ぎ自衛するために、多くの医療施設でそれぞれ工夫しながらCOVID-19と闘っています。今まで当然使い捨てだったものが急に使いまわして大丈夫と言われ、仕方ないとはわかっている、本当は使い捨てられているのは医療者なのではと感じることもあります。それでも現場は、感染を食い止めるため、それぞれが考えられる限りの知恵を絞っています。しかし気概と竹槍で戦うには長期すぎると感じています。また同じ医療者であっても危機意識の差により自衛する者、スタッフを守るために必死である者、自衛するものを過剰と嘲笑する者までさまざまです。何が正しくて何が間違いなのかまだわかりませんが、危機意識の温度差から危機意識の高い人たちが心身

ともに疲れてしまうことを心配しております。ご紹介した手作りPPEはあくまで応急処置であり、現場がこのように時間稼ぎしている間に、行政や病院組織が安心して医療を提供できる体制を整えていただけると信じて、皆がんばっています。一日も早く事態が収束し、ゆっくりお酒が飲める日がくるといいですね(フェイスシールドはしたままでしょうかね)。

